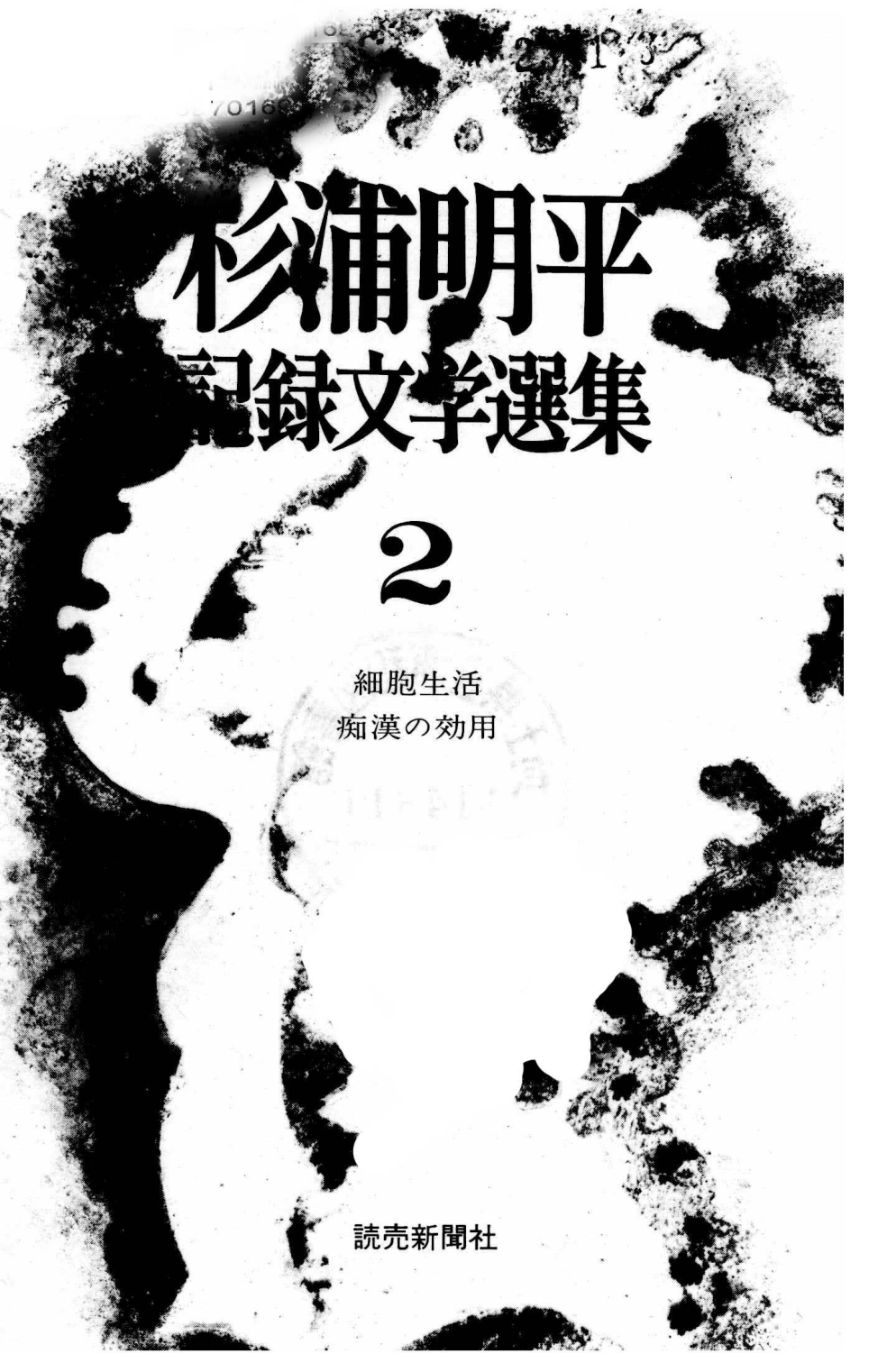




02 2 1 3
70163

杉浦明平

記録文学選集

2

細胞生活
痴漢の効用

読売新聞社

杉浦明平

作家・文芸評論家。大正二年愛知県渥美郡福江町（現在は渥美町）生まれ。東大国文科卒。同大学院に在学中、東京外語大でイタリア語を学び、ルネッサンス文学を研究、社史編纂、雑誌編集等の仕事に就く。敗戦後は故郷で文筆業に専念。かたわら、昭和二十四年日本共産党入党、約十年間在籍し、二十七年には福江町教育委員、三十年から三十八年まで渥美町町議会議員として活躍した。現在新日本文学会会員。代表作に「椿園記」「小説 渡辺畢山」がある。現住所 愛知県渥美郡渥美町折立

杉浦明平記録文学選集 2 全4巻

細胞生活 痴漢の効用

昭和四十七年一月二十日 第一刷

著者 杉浦明平

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

〒104 東京都中央区銀座三二二一

〒530 大阪市北区野崎町七七

〒803 北九州市小倉区明和町一一一

印刷 大日本印刷株式会社

製本 協和製本株式会社

定価 八五〇円

©, Minpei Sugiura, 1972

第二卷 目次

細胞生活 3

痴漢の効用 247

小さな町から 249

避病舎移転騒動 284

アサリどろぼう 341

極秘書類 363

ビニールの袋 370

中学校建築奇談 264

掘割事件顛末 309

村の選挙と女たち 350

痴漢の効用 367

解説 佐々木基一

374

装丁
水谷
勇夫

細胞生活

— 共産党員の悲しみと喜び —

はじめに

わたしは、一九四九年（昭和二十四年）一月二十一日に日本共産党にはいりました。そして郷里であり、現在もそこに住んでいる、愛知県渥美郡福江町（現在、渥美町）に福江細胞をつくり、そのまま今日にいたったのです。一九四九年から今日まで、わずかに七年ですが、その間、じつにさまざまな世界史的事件が日本にもおこりました。田舎に住んでいたわたしたちのところまで、そういう大きなうごきの余波がひびいてきたものです。細胞というものは、政治団体なものですから、ひとつびとつ、そういう問題の余波を浴びねばなりませんでした。

わたしは今まで、共産党員が基地反対とか、台風とか、選挙とかにたいして、どのようにたたかったかを報告してきました（『ノリソダ騒動記』、『基地六〇五号』、『台風十三号始末記』など）が、この本では細胞じしんの生活と、その伝記を書きました。

どこの町や村、あるいは工場や役所でも、共産党員が三人以上いるところでは、細胞をつくります。住居を中心とするものは居住細胞、仕事先につくられたものは経営細胞と言ひ、いずれも会議をもって、党員が、どのように活動するかを決定することになっています。

細胞の上には地区委員会、地区の上には県（都、府）委員会——地方委員会——中央委員会があります。大きな都市には、細胞と地区とのあいだに市委員会が存在することもあります。わたしたちの福江細胞は、全国に何百何千とちらばっている居住細胞の一つで、東三地区委員会に所属して、その指導をうけることになりました。

わたしは、共産黨員であることを誇りに感じていましたし、今も感じています。そして、わたしじしん欠点の多い人間ですし、どんな黨員もただの人にすぎませんが、しかし、それでも黨員というものは、だれよりも誠実で、勤勉で、献身的で、しかも聡明でなくてはならぬ、と信じています。いや、今そうでなかったら、そうなるように努力しなければなりません。だからこそ、わたしも、共産黨員の一人であることを誇りにおもっているわけです。が、現実には、わたしの理想のようではなく、しばしば、わたしの誇りが曇るのを感じます。とくにわたしの入党した一九四九年からの六年間はそうでした。

共産党では、あらゆる上部機関（たとえば地区委員会）と、下部機関（たとえば細胞）のあいだには一分の隙もあつてはならぬ、こういうことになっています。「鉄のような、かたい団結」がなくては、はげしい弾圧に抗して、政治的な運動ができないからです。が、この本では、地区委員が悪玉として出てきますし、細胞と、ちっとも意志も、感情も疎通しているように描かれていません。残念なことですが、これは細胞の実感でした。もちろん、細胞の感じかたに、あやまりがない、というわけではありませんが、少なくとも、わたしたちの細胞は、このような理想とのくいちがいを、身にしみて感じたのでした。

この本の中には、地区委員以外の党機関がほとんど登場しないではないか、と言われるひとがあるかもしれません。そのとおりで、じつは、その六年間に、細胞へやってきたのは県委員が一回きり、地方委員とか、中央委員とかは雲の上の存在で、豊橋でひらかれる重大な会議に出席をゆるされたものでなければ、姿を拝んだこともなかったのです。したがって、細胞の相手は、いつも地区委員だけでした。もともと、六全協（第六回全国協議会）後、地区もじつは、上部機関の犠牲者であつたことが、あきらかになったようです。

ついでに言えば、六全協後のいろいろな会議で、この六年間の、党内の実情が報告されましたが、それは

まったくひどいものでした（もちろん、こういう過去の批判では、悪いことや、あやまちの指摘や、暴露がつよくなりがちなものですが）。この本にしばしば登場する川口務君が、その報告をきいて、つぎのように言った感想には、みんな同感しました。

「なるほど、党内はそんなでたらめだったのか。それを聞いて、おれは安心したよ。じつは、今まで上部機関はまちがいを犯さず、正しくやっているのだらうと信じていた。ところが、いくらおれたちが一生けんめいに努力しても、党は弱くなり、選挙のたびに、票はへるばかりだったので、絶望していたんだ。今日の報告によると、上部は話にもならないほど、ひどい状態だったらしいな。それなのに、ともかくこの東三区だけでも、ずっと四千なり、五千なりの支持者を失わないでいたとしたら、今後ほんとうに党が正しく活動したら、どれだけ伸びるか分からんであら」

わたしも川口君の意見にほぼ同感です。だから、この本では、人によっては、内証に伏せておくべきだ、と言うかもしれないことまで書いたのです。というのは、この本の叙述は、二つ三つのことがらを除いては、「六全協決議」の発表される一月まえで終わっていますが、それ以後、ここに書かれているようなあやまちは、急速に修正されて、党活動は目ざましく改善され、機関と細胞とのつながりは緊密になりつつあるから、発表しても危険はないし、もし、まだあやまちが修正されていなかったら、昨日のにがい経験をふりかえって、ただちに修正されねばならぬと信じるからです。＊

もとより、わたしの経験はせいまいだけでなく、半島の尖端に位する、小さな田舎町という特殊な条件つきです。から、あらゆる細胞や、地区委員会が同様だった、と主張するわけではありません。が、この細胞の味わった、かずかずの悲しみや喜びの中には、他の細胞にも、また共産党を知らない人びとにも、共通するものがあるでしょう。そう思うから、この本を書いたのです。

執筆にあたつては、できるだけ事実を、正確に報告することを願いました。真実だけが、正しく美しいのです。それゆえ、登場人物の名前も、ごく特殊な理由のある、二、三名をのぞいては、わかつているかぎり実名をもちいました。

ただ、いちばん残念なことには、当時の非合法主義という情況のもとでは、機密に属する書類を保存することは危険であつたから焼きすててしまつたし、また、いろんな事件や人物を、メモや日記に書きとめておくことさえ、安全とはいえなかつたので、ほとんど記憶による以外に、記録が残っていないのです。そのために、時間的な前後や、事件の細部に、若干の錯誤がないとは言いきりにくいのです。しかし、だいたいは、真実に近いものと信じています。

なお、わたしたちの細胞には、この本に出てくる以外にも、数人の人びとが、黙々として、じぶんにあたえられた任務をはたしていることを、書き落とすわけにはゆきません。

この本を書くのに、旧福江細胞の友人たちに、資料の点で大きな援助をもらいました。が、その他の点は、まったくわたし一人の責任で執筆しました。川口務君など、何を書かれたか、心配でオチオチしない、と言っているほどです。

一九五六年九月九日

著 者

*この見方も甘すぎた。

明平さん、共産党に入党

ちつともはいってゆかないな。明平さんは、じぶんがあせってゆくのを感じながら、早口にしゃべりつづけていた。

「共産党というものは、けっしてみなさんの私有財産を没収しようと思図しているわけではありませんでね。生産手段、つまり工場だとか機械だとかを社会化しようとするだけで……」

それは八畳の部屋だった。集まってきた十四、五人は、ときどきタバコを吸いながら辛抱して聞いているらしかった。明平さんはアカハタの「主張」を思いだした。これなら、みんな食いつくかもしれないぞ。

「いまでは選挙のとき共産党に一票を投じるだけでけっこうなんです。それだけで黨員になれます。ぜひみなさんも入党してもらえませんか」

そのとき農民らしい日焼けしたマスクの中に、たしかに反応が見えた。ただし、その聴衆の顔にあらわれたのは明平さんの予期した効果と正反対のものだった。それはどうもわからん、ますますわからんという表情以外ではなかったのである。明平さんは、いっそうあせりだした。

杉浦明平氏が共産党へはいってから二月ほどたった。東京で入党して福江へもどる汽車の中

で、明平さんは、美知子夫人にどういうふうに入党の始末を話したらいいかなどと苦慮していたのに、家ではもうちゃんと知っていた。そして、「お父さんが、共産党にはいつてもいいが、あんなに宣伝しなくてもよさそうなんだ、とこぼしていらいしゃいました」と告げた。というのは、明平さんも豊橋から乗ったバスの窓から気づいたことであつたが、豊橋——福江間四〇キロの県道ぞいの電柱は二、三本おきに、

郷土の評論家杉浦明平氏ら入党す

と、赤丸つきのビラが貼りつらねられていたからであらう。そのおかげで、挨拶したり、弁解したり、隠しだてしたりする手間ははぶくことができた。が、なんとなく、一人だけ宙に浮かびあがっているようで、町へ出歩くのも、なんとなくそばゆいおもいだった。

だが、一九四九年（昭和二十四年）の総選挙は三十六名の共産党議員を当選させた。明平さんたちの選挙区、愛知第五区でも当選はしなかったけれど、共産党神道寛次氏は二万数千票で次点という好成績を示したものである。

福江の町には細胞はまだ存在しなかったけれど、党员はいた。明平さんが、夕方、自転車で行く物に出かける途中、古田の坂の上で、粘土と粉炭とをこねている青年をよく見かけた。体もまるいし、顔もまるくふとって、ヒゲのない、血色のいい童顔でニコニコわらいながら、「やあ」と粘土でよごれた手をあげて、向こうから明平さんに挨拶するのがつねであつた。明平さんが入党すると、その青年萩原文男君はさっそくやってきた。かれこそ、この町におけるただ一人の共産党员だったので

ある。

敗戦直前に、東京から郷里に引きあげた明平さんは、そのころ、むらがりおこったいろいろな文化サークルに関係していた。もともと短歌会も、文化懇談会も、演劇グループも、経済学研究会も、顔ぶれはほとんど同じだったが。そういういろんな会に出てくる青年の中には、明平さんの信頼する四、五人がいた。その中でも中山の清田和夫君は一ばんたよりになる。入党して福江にもどってきた明平さんは、清田君に、「共産党へはいらないか」とすすめた。清田君は、じぶんも当然そのつもりでいる。が、家庭のほうを少しきちんとして、父親とはつきり話をつけるまで待ってもらいたいと答えた。明平さんが共産党になった以上、たとい、すぐ入党しなくても、かならず近いうちに清田君もはいるだろうというのが、一般の人びとの予想だった。

清田君につづいて、山本道雄君たちも、と言っているらしかった。が山本君についていえば、父親が中風で倒れて、家を守っているのは六十近い母親だけであり、しかも姉はあっても、末子のたった一人だけの男の子だから、明平さんも入党をすすめるにしのびなかったらしい。

それはともかく、前町長の後とり息子で、大学を出ている明平さんの入党の波紋はかなり大きかったようだ。がしかし、黨員になったら、どういふ活動をしたらいのか、明平さんには見当もつかない、ひと晩、中山へ来て共産党とは何か、ということを話してもらえないだろうか、関心をもっている人も少なくないから、と提案した。そして清田君は、新しく分家した新夫婦の家を借りて、人びとを呼びあつめた。

明平さんの考えでは、共産党のことを説明すれば、すぐにみんな共鳴して、入党しないまでも、今後、われわれのファンになるだろう、と意気込んで出かけたものであった。が共産党とはどういうものか説明しても、ちっともみんな共感を表明しない。明平さんの吃りどもりで早口のおしゃべりが、片っぱしから、その百姓たちのこわい皮膚から、はねかえされてゆくのがはつきり感じられた。みんな、もっとおもしろい話を期待してやってきたのに、その期待が裏切られて、かなり退屈なのを辛抱していることさえ、わかったのである。そこで明平さんは、もう一度、方向を転じて、もっとセンセーショナルな話題に移ることにきめた。

「ところで共産党は世界に平和をもたらすものですが、日本の帝国主義は残虐ですね。さいきんソ連から引揚者がもどってきて、いろいろ話が出ております。ソ連が日本の捕虜を虐待したというが、帰ったひとにきいてみると、ソ連人じしんがパンもなければ靴もはいておらん、しかし日本人には捕虜規定どおりのものを配給してくれる。ところが日本軍の将校がとても非人間的なんだそうです。

一般の兵隊は雪の中で働いておるのに、将校は何もしないで火鉢にあたりながら、敗戦前と同じように兵卒を労働だけでなく私役にもこきつかう。しかも兵卒に割りあてられた配給食糧をくすねて、じぶんたちだけごちそうをこしらえ、腹いっぱい食っている。兵卒は一日中くたくたに働いて帰るが、わずかの食物しかあたえられない。もし文句をいえば、昔とおなじように、ビンタをとられ、営倉のような所へぶちこまれる。捕虜になっても将校は兵卒を人間あつかいにしない……」

「異議ありッ！」と突然、一ばんうしろにすわっていた男が、さっと立ちあがった。「え？」と明平さんがどきまぎした隙に、ひきしまった精悍な体つきをぶつけるように、部屋じゅうひびきかえる甲

高い叫びで、一気にどなりつづけた。

「今の発言はまっかな嘘であります」

「いや、ソ連から引きあげた人らがそう言っておるのですが……」と、明平さんは狼狽して口ごもった。

「私は南カラフト大谷通信部隊に勤務していましたが、将校と兵隊のあいだがそのように大猿の間がらであったということは、まったくありませんでした。輸送困難で食糧はとぼしく、とかく不足がちであったが、部隊長は部下をわが子わが弟のようにあわれみ、兵もまた、部隊長殿を親とも兄ともたのんで、とぼしきものを分かちあつて一家のごとく暮らしてきました。私は運よく公用で戦友二十名とともに終戦の年の三月、ワッカナイに上陸したため捕虜になることをまぬがれましたが、本隊はカラフトにおいて、一部は降伏をいさぎよしとせず抗戦して全員玉碎し、一部は捕虜として長くカラフト、シベリアに抑留され、昭和二十二年、内地に送還されるまで、かの地において言語に絶する苦役を味わったのであります。

引きあげた戦友の話によると、わが部隊は、ソ連兵らのために乏しい食糧とノルマ、ノルマで酷使され、もはや倒れるか餓死するか、それとも全員いさぎよく自決しようかという境地にも再三迫りこめられて、ああ、二度と祖国の土を踏み、なつかしい家族の顔を見ることはできぬかと男泣きに泣いたこともあるようですが、そのとき、われわれの部隊長殿は、もう少しの辛抱だ、がんばってくれ。おまえらがここで倒れて異国の土になってしまつては、部隊長としておまえらをあずかつたわしが、おまえらのご両親に会わせる顔がない。やがて日本へ帰れる日がくるであらう。それまで、なんとか生

きようではないか、とはげまされ、兵たちはこの部隊長を、父とも母ともたよりとし、たがいに手をとって、助けあい、齒を食いしばって、二年何か月のあいだソ連兵の苛酷なる使役に堪えしのんできたのであります。

われわれの部隊長は、われわれ兵卒を愛撫され、兵卒は部隊長を親ともしたってきたのであって、日本の将校が兵卒をけだもののように取りあつかったというのは、まったく事実ではないのであります。

さいきんも部隊長殿は、旧部下がその後どのようにくらしているか見るために、はるばる福江までたずねてこられたのであります。私は偶然、外出中でお目にかかれなかったが、畠村の何某に『渡会わたらいは元気でくらしているか。もし会ったらよろしく伝えてくれ』と言いのこして行かれた。われわれは、この部隊長を中心に毎年集まろうではないか、何々会という会をつくらうではないか、と相談しているほどであって、現地において将校と兵卒とのあいだが親子のように緊密であつたからこそ、このようないいんみな関係が、今でもつづいておるのであります。終りッ」

やや、いないないなふうなG I刈りにしたその青年のあから顔を、明平さんはことばを失つて見つめていた。明平さんが今まで一時間半近くルル説いたことより、この反駁のほうがはるかに血がかよつて、実感と確信をもつて聴衆を魅したようだ。たくさんの目があわれみと軽蔑とをまじえて茫然たる明平さんにそがれている。

すると清田君がたすけるように発言した。

「なあ金坊、おれも士官学校にいてたくさんの将校を見たがなあ、たしかに金坊のいうようなりつぱ